S05

18年3か月にわたる歯科的成育支援の1例

もりたか小児歯科医院
森高　久恵

[諸言]乳歯列期にう蝕予防で来院した患児も定期検診をくり返し永久歯列が完成するまでに他方面からの歯科的支援が必要となる場合がある。1歳9か月からう蝕予防で定期的に来院し、混合歯列期に不正咬合の治療希望が出たため矯正治療を行い、20歳に到った症例について報告する。

[症例]　1991年3月生　女児

初診1992年12月14日1歳9か月。上下顎とも第一乳臼歯まで16歯萌出。弄指癖を有し、上顎前突と叢生がみられた。主訴はむし歯予防で、う蝕はみられなかった。口腔衛生指導とフッ化物塗布を行ない、弄指癖については観察とし、4か月毎の定期検診へ移行した。弄指癖は自然に消失し、う蝕の発生もなく経過した。混合歯列期に上顎両側犬歯の唇側転位が発現したため、パノラマエックス線撮影を行なったところ下顎両側第二大臼歯の水平埋伏と第三大臼歯歯胚の存在が確認された。2003年3月矯正治療希望が出たため、九州歯科大学附属病院口腔外科へ紹介し下顎両側第三大臼歯歯胚摘出後、上下顎両側第一小臼歯を抜歯し、マルチブラケットで歯牙を配列した。2008年9月に保定装置へ移行し、2011年3月保定を終了した。今後は歯列の安定維持の観察、う蝕および歯周疾患の予防のため定期検診を継続する予定である。

[考察]小児歯科で定期検診を継続していると成長とともに来院当初の主訴から離れ、歯周疾患や歯列咬合の問題が生じることが多い。本症例では混合歯列期に不正咬合が新たな主訴になったため、歯科的成育支援として矯正治療を行なった。動的治療期間は長期化したが、現在、審美的にも機能的にも満足を得られており、小児歯科における定期検診による長期管理の重要性を再認識させられた症例であった。

S06

未就学児の健康・食生活に関するアンケート調査

入江　英仁　(入江歯科医院)

[目的]食育基本法が施行され、各市町村でも食育推進計画が作成、推進されている。今後、効果的な食育を推進するために地域差を探ることを目的とし予備的に生活習慣、食生活に関するアンケート調査を行った。[調査対象及び内容]H22年6～7月、H県T市内の2幼稚園に通園する園児及び医院来院患児の保護者に対して「健康・食生活に関するアンケート調査」を実施した。内容は食生活に関与する基本的生活習慣と食生活に関しての17項目。主な項目は就寝時間、朝食の欠食、間食の回数、食事中に気になること、食育に対する保護者の意識等で、185名より回答を得た。[結果]健康状態は「良好」94.6%に対し「崩しやすい」が5.4%であった。就寝時間は「21時前」が60.5%、「21－22時」が33.5%を占めた。朝食は「毎朝食べる」が95.1%。「朝食を摂る」は「朝の洗顔」とともに就寝時間が遅くなるほど減少する傾向がある。食事の時間では「やや不規則」が4.9%「非常に不規則」は0.0%。間食回数は0回1.6%、1回71.4%、2回22.2%、4回以上0.5%で、年齢が上がるにつれて回数が減少し時間も定まってくる傾向がある。食事中気になることでは「有り」84.3%で、内容は「速い・遅い」42.9%、「遊び食べ」35.9%、「偏食」「姿勢が悪い」共に34.6%等が多かった。食育の内容で大切だと思うのは「食べ物を選択する能力」「元気な身体のわかる能力」「味がわかる能力」「食べ物の育ちを感じる能力」「料理する能力」の順。[考察]前回の農業を主産業とする地域での調査で見られた項目間の強い相関性が、今回の都市圏で見られなかった。これは保護者の職業、就業形態、通勤時間など生活形態の多様化が影響するのではないかと推察され、さらに調査の必要がある。今後の食育推進では基本となる生活形態を考慮し選択可能で、より個別的なメニューの提示が必要になる。